

深層失読 (deep dyslexia) を呈した小児後天性失語の1例

中村 光¹(なかむらひかる)、畑中政実²

岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科¹
三重県立草の実りハビリテーションセンター訓練科²

(要旨) 症例は、左前頭葉の脳動脈瘤破裂後に失語とともに読字障害を呈した発症時13歳4ヵ月の右利き男児。発症約1年後に音読検査を行い、この結果を健常者へのアンケート調査により刺激語の親近性を揃えて分析・検討した。その結果本例には、漢字語における豊富な意味性・形態素性・視覚性の語性錯読、音読成績に対する語の心像性や品詞の影響、非語の音読困難、という深層失読の特徴が認められた。しかし仮名語においては意味性錯読は少なく、この点や成人例との異同、深層失読の右半球仮説について議論する。

Key words: 深層失読、小児失語、語の親近性、漢字と仮名、右半球仮説

はじめに

MarshallとNewcombe(1966)以来、多くの深層失読(deep dyslexia)例が報告されている。それらのほとんどは成人例または発達性障害例で、児童期発症の報告は少ない。また深層失読では音読において、具象語より抽象語の成績が低下する心像性の影響、名詞よりも形容詞・動詞の成績が低下する品詞の影響がみられるが、本邦における検討は刺激語の属性について十分に統制されていないものが多い。

われわれは13歳で発症した深層失読例に対し、可能な範囲で刺激語の属性を統制したうえで、その音読成績について検討したので報告する。

症例

症例はTM、発症時13歳4ヵ月の右利き男児。学業成績は普通であった。1996年11月23日、突然の意識障害にて発症、某病院に搬送され左前頭葉脳動脈瘤破裂と診断され、開頭手術を受けた。その後約1ヵ月後より意識が回復し始め、1997年2月28日にリハビリ目的で草の実りハビリセンターに転院となった。

転院時、神経学的には右片麻痺、右顔面神経麻痺、右同名半盲を認めた。精神医学的には特記すべきことはない。1997年3月28日のCT検査では、Broca領野、Wernicke領野を含む左半球の皮質・皮質下の広い範囲に低吸収域を認めた。

この時点では、明らかな失認・失行は認めなかった。WISC-RのPIQ57、Raven色彩マトリシ

ス検査は15/36であった。言語面では、自発話は著しく少ないが構音障害はない。中等度の聴覚的理解障害(SLTAの「短文の理解」7/10、「口頭命令に従う」2/10)と呼称障害(「呼称」8/20)を認めた。復唱は2文節文まで可能。読解は聴覚的理解より良いが「漢字単語の理解」「仮名单語の理解」とともに10/10、「短文の理解」9/10、「書字命令に従う」4/10)、音読は「仮名单語」5/5に比し、「漢字単語」1/5と漢字で不良であった。書字は書称で「漢字単語」2/5、「仮名单語」0/5と重度の障害であった。

1997年10月(発症11ヵ月後)では、WISC-RのPIQ68、Raven色彩マトリシス検査は31/36と改善した。言語面では、発話量はやや増加したが依然少ない。聴覚的理解障害はSLTAの「短文の理解」10/10、「口頭命令に従う」4/10と軽度障害のレベルに回復、呼称の成績も16/20と改善した(意味性錯語なし)。復唱は2文節。読解は「短文の理解」9/10、「書字命令に従う」4/10と改善し、音読も「仮名单語」5/5、漢字単語3/5と改善を認めた。書字にはほとんど改善がみられなかった(意味性錯書なし)。

音読検査

1997年11月～1998年1月(発症12ヵ月～14ヵ月後)にかけて単語の音読検査を施行した。

検査語は通常漢字で表記される漢字語と通常仮名で表記される仮名語から成り、それぞれ小学校4年生までに学習するものから選択した。表記・品詞別には以下の通りである。漢字

表記の具象名詞語、抽象名詞語（以上は2～3文字熟語）、形容詞語、動詞語、具象1文字、抽象1文字、および仮名表記の具象名詞語、抽象名詞語、形容詞語、動詞語、副詞語、1文字、非語（2～6文字）。

手続きとしてはまず、仮名1文字（101字）および仮名非語（20語）を除き、それぞれ18語前後の語を用意して音読検査を行った。次に専門学校生20名を対象に、これらの語の親近性（familiarity）を5段階で評定してもらい、さらに名詞語については具象語か抽象語かの二者択一の判断をしてもらった。その結果、50%以上の方が具象・抽象の判断に同意しない語をリストから除外し、さらに各品詞間の親近性を揃えるためにいくつかの語を除き、各品詞別に15語ずつを分析の対象とした。

各品詞間の親近性をANOVAにて検定した結果、仮名語では品詞間に有意差はなかった（ $p = 0.48$ ）。いっぽう漢字語では有意差が認められ（ $p < 0.001$ ）、親近性の高い順に形容詞、動詞、具象1文字、具象名詞、抽象名詞、抽象1文字であった。

結果

音読検査の正答率を表1に示す。心像性や品詞による正答率の違いが、とくに仮名語で顕著に認められた。すなわち名詞間では具象名詞が抽象名詞より成績が良く、品詞間では名詞が良く、動詞と副詞がそれに続き、形容詞で最も成績が低かった。非語はほとんど正答しなかった。いっぽう漢字語では成績差はそれほど明かかではなかったが、最も親近性が高いはずの形容詞で、最も成績が低かった。

次に、仮名1文字および仮名非語を除いた分の誤反応の分析結果を表2に示す。漢字語では無反応が最も多く、意味性または形態素性の語性錯読（両者は必ずしも明確に区分別できない）および無関連性のそれが多く認められた。仮名語では視覚性の語性錯読が最も頻出し、意味性または形態素性の誤りは多いとはいえなかった。仮名非語では無反応が8、語彙化の誤りが6、その他が4であった。

考察

深層失読の特徴は 豊富な意味性・形態素性・視覚性の錯読、音読成績に対する語の心像性や品詞の影響、非語の音読困難、とされる（例えばColtheart, 2000）。本例は基本的にはこのような特徴を満たし、深層失読であると考えられる。

深層失読において、上記の の特徴のなかでは、とくに意味性錯読が重視される。本例は漢字語においてはある程度の量の意味性錯読を呈したが、仮名語においてはほとんど意味性錯読を呈さなかった。Sasanuma（1986）の2例、浅野ら（1987）などの成人例でも仮名語における意味性錯読は少なく、日本語における特徴かもしれないと考えた。

また本例は左半球の広範囲にわたる病変をもち、深層失読の右半球仮説（Coltheart, 1980）を支持するものかもしれないと考えた。

表1：音読正答率 単位：%

	漢字語	仮名語
具象名詞	73	93
抽象名詞	73	53
形容詞	53	36
動詞	80	57
副詞	-	53
漢字具象1文字	67	-
漢字抽象1文字	60	-
仮名1文字	-	50
仮名非語	-	10

表2：誤反応分析 単位：回

	漢字語	仮名語
語性錯読		
意味性	3	1
形態素性	4	0
視覚性	0	16
無関連	4	3
字性錯読	2	2
新造語	0	6
無反応	16	2